



Interview

仕事人インタビュー

働くことで、 より自由に生きられる

木村文乃さん

俳優

—プロとしての自覚が芽生えたのはいつ、どのよう
なきっかけでしたか？

16歳のときに受けた映画のオーディションがデビューのきっかけです。でも、高校生だった私は学校生活の方が楽しくて、本気で俳優業を仕事にしようとは思っていませんでした。プロの俳優として生きること、考えるようになったのは、22歳で所属事務所を移籍したころです。社長の山本又一朗さんから「やるからに

はトップを目指せ」と叱咤されたのが転機でした。

私はそれまで、仕事で出会う大人に対して、あまり良い印象を持っていませんでした。かつて、自分の意に反して事を運ばれて、嫌な思いをした経験が度々あったためです。そんな私に、年齢や立場を超えて、一人の人間として正面から向き合ってくれたのが山本社長でした。「この人となら、自分を変えられるかもしれない」と思えたことで、仕

事に取り組む姿勢が変わりました。

—これまでにぶつかり、乗り越えてきた「壁」は何ですか？

はじめのうちは、自然に笑ったり泣いたりすることが上手にできず苦労しました。どちらも俳優の仕事には欠かせない感情表現なのに、うまく表情に出せなくて。当時は毎日、鏡を見て笑う練習をしていた記憶があります。今にして思えば、

もともと人と関わるのが苦手だったこともあり、自身の感情を率直に相手にぶつけることに臆病になっていったのかもしれない。毎日の練習のおかげか、やがて自然に感情を表現できるようになり、笑顔をほめてもらう機会が増えました。

—仕事において、お手本にしている人はいますか？

同じ事務所の先輩に小栗旬さん、綾野剛さん、田中圭さんなどすごい方々が

て、妹分のようにかわいがっていただいています。俳優という仕事仲間ではありませんが、まるで家族のように接してもらい、ときには演技論などお互いの意見をぶつけ合うこともあります。そんな時小栗さんは、私の考えに耳を傾けた上で「それはどういうこと？」なぜそう思うの？と真剣に質問を返してくれます。

映画『追憶』(2017)で小栗さんと共演した時、撮影直前になって、主演の岡田准一さんと小栗さんがカメラマンから「好きに演じていい」と任されたシーンがありました。とはいえ、脚本から逸脱するわけにはいかない上に、時間の猶予もありません。そうして迎えた本番で二人は、ほぼアドリブで見事に息の合った演技を見せ、完成した作品でもそのテイクが使われていました。すぐそばで見

ていて、これがプロの仕事か、とても真似できないと驚かされました。

—そんな格好いい先輩たちの背中を追いかけながら、彼らがその域に到達するために辿った道のりを私も歩いてみたいと考えるようになりました。

—新型コロナの影響が

映画やドラマの撮影にも及んでいるようですが、生活に変化はありますか？

これまで、前だけを向いてがむしゃらに走り続けてきたので、立ち止まって足元を見る余裕がありませんでした。また、俳優の仕事はオンとオフの切り替えが難しく、完全なプライベートが持てません。現在はスケジュールにゆとりができたことで、仕事を離れて自分自身と向き合う時間を持つことができていると思います。改めて自分の将来について考

える機会だと捉えるようにしています。

—木村さんにとって働くことの意味は何ですか？

私は働くことを、より自由に生きるための手段だと考えています。働いて得た収入で生活の質を向上できるし、経験を積んで地位が上がるれば、進みたい道を自ら切り拓くこともできる。働くことで選択肢が増え、さらに新しいことに挑戦できるようになります。

—みんながいきいきと働ける社会のために何が必要だとお考えですか？

後輩から悩みや相談を打ち明けられる時に、「普通は○○だから……」という言葉をよく耳にします。それに対して、私は「他人の評価を基準に自分を枠にはめて考えなくていい」と答えています。

普通、つまりみんなと同じであることは楽ですが、そればかりにとらわれていては足元をすくわれます。他人の評価を気にせず信じた道を進めば、自分らしさを見失わずに歩いていける

他人の評価にとらわれず、 自分が信じた道を進む

木村文乃(きむら・ふみの)

1987年、東京都生まれ。2006年映画『アダン』でデビュー。2014年第38回エランドール賞新人賞を受賞。映画『伊藤くんA to E』、『ザ・ファブル』、ドラマ『七人の秘書』、大河ドラマ『麒麟がくる』など多くの映画やドラマに出演。21年7月から、ドラマ『#家族募集します』でヒロインを演じる。

—「YELL」の読者である若い世代へメッセージをお願いします。

何より大切なのは、仲間をつくることです。これは、10代のころ、全ての大人を疑っていた自分に向けてのメッセージです。悩んだり行き詰まったりしたとき、方法が分からなければ聞けばいい。自信が無ければ頼ればいい。うまくいけば喜びを共有すればいい。SNSなどコミュニケーションが多様化している現代は、昔よりも仲間とつながることがずっと簡単なはず。そうやって世界の輪を広げること、人は成長できるのだと思います。